

英語コーパス学会 Newsletter No. 86

July 20, 2019

■会長 投野 由紀夫
■事務局 〒157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20 成城大学社会イノベーション学部 石井康毅研究室気付
■郵便振替口座 00930-3-195373 (英語コーパス学会)
■URL: <http://jaecs.com/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

高見敏子先生を偲ぶ

石川慎一郎
(神戸大学)

2000年頃だったか、何かの研究会からの帰路、高見先生と雑談をしていて、先生と自分が同い年であることがわかった。研究仲間と同世代はいても完全な同年齢は少ない。「いやあ、僕たち、コーパス69年倶楽部ですね」と話が盛り上がった。

2004年、私はコーパス研究と関わりが深い統計学を勉強する必要性を感じ、統計数理研究所(ISM)の共同研究に申請することとした。そのとき、何名か仲間を集めて申請する必要があったのだが、真っ先に声をかけた1人が高見先生であった。

高見先生はISMの研究会にも熱心に参加され、議論をリードしてくださった。高見先生の鋭い指摘にプロの統計学者が舌を巻く場面も多くあった。高見先生と話していると、言語であれ、統計であれ、あるいは日常の様々な事象であれ、彼女が「物事の本質」を見抜く卓越した能力を持っていることがすぐにわかった。それは自分には決してない能力で、高見先生の才能を羨みつつも、「69年倶楽部」の同士としてはどこか誇らしくも感じる奇妙な感覚だった。

高見先生との交友はさらに深まり、2010年に言語統計の本を共著で出したときには、「札幌合宿」も挙行了。高見先生は、遠来の客をもてなそうと完璧なプランを立て、札幌の寿司、地元で有名な名店のコーヒー、そして後に話題となるスープカレー等、数々の土地の名物で我々をもてなしてくださいました。

以後、仕事や私用で札幌に行くときには、高見先生に連絡し、つれあいと一緒に3人で昼食や夕食を一緒に取るようになった。高見先生の雑談は、知性とユーモアが見事に融合したもので、聞

くものを惹きつけた。研究室改修時に個室に水道を引けるよう大学当局と果敢に戦った武勇談、授業準備に追われてしばしば研究室に泊まり込むというお話、先生が開発されていた多読管理システムのかわいらしいマスコット作成の裏話、趣味のパン作りのお話等、今も心に残っている。

高見先生はいつも謙虚で、人を立てることはあっても、決して自慢ということをされない。しかし、軽妙なお話からも、先生が揺るぎない信念をもって研究やお仕事に真摯に向き合っておられることがひしひしと伝わってきた。

その後、高見先生は職場での仕事がさらにお忙しくなり、ISMの研究会もここ数年はお休みをされていたが、北海道大学の全学多読プロジェクトを牽引しておられること等、ご活躍は耳に入っていた。またお寿司でも一緒に食べたいな、お誘いしてみようかな、と思っていた矢先、御病気により、先生が2018年10月19日に逝去されたことを知って言葉を失った。

2019年の3月、恒例のISMの研究会が立川で開催された。会場には、高見先生を偲び、先生の好きだった花が飾られた。また、ISMの共同研究の立ち上げ時からの仲間である6名(石川有香・後藤一章・田中省作・田畑智司・中尾桂子・石川慎一郎)による追悼論文「言語研究と言語教育に統計をどう活かすか—高見敏子氏の研究から考える—」が刊行された。論文刊行にあたっては、ISMで我々を指導くださっている前田忠彦先生や、前田研究室の中川原千織研究補佐員がいろいろとお骨折りくださいました。

この論文は、その後、高見先生のご家族や北大の先生がた、また、学生のみなさんにもお読みいただくことができたが、一番読んでほしかった人は今は天上である。高見先生の御研究の意義を世に伝えるべく筆を執ったが、力不足のため、不十分な箇所も多いのではないかと思う。しかし、高見先生であれば、おそらくはにっこり笑って許してくれるであろう。

もともと会員が2名しかいなかった「コーパス

69 年倶楽部」はすっかりさみしくなっていました。解散も考えたが、彼女が研究や教育に注いできたあふれる情熱を思えば、2 人で作った会ののれんを勝手に下ろすのはまだ早すぎるかもしれない。残された者には残された者の責務があるからだ。今はただ天上の高見先生のご冥福を祈るばかりである。

参考文献

石川慎一郎 他 (2019) 「言語教育と言語研究に統計をどう活かすか—高見敏子氏の研究から考える—」『統計数理研究所共同研究リポート』414, 169-182. bit.ly/takami_satoko

■ 春季研究会報告

2019 年 4 月 20 日に名古屋工業大学にて、英語コーパス学会 2019 年度春季研究会が開催されました。2019 年度春季研究会では、英語コーパス学会の 5 つの研究会 (SIG ; Special Interest Group) である ESP 研究会, ツールと統計手法研究会, DDL 研究会, コーパスと CEFR 研究会, 語彙研究会の紹介と研究発表がなされました。

2019 年度春季研究会では 5 つの研究会が連続して発表等を行うことで、参加者はすべての SIG の発表を聞くことができました。各 SIG は 30 分の持ち時間を工夫して、発表を行いました。

以下、各 SIG の発表の概要です。

■ 語彙研究会 「コーパス準拠型語彙研究の諸相」

石川慎一郎氏 (神戸大学) の司会のもと、以下の 2 件の発表が行われました。(1) 「EMI のための英語学術語彙リストの比較考察」杉森直樹氏 (立命館大学・研究会代表), (2) 「高校 3 年間の英語スピーキング力の発達: 語彙の観点から」阿部真理子氏 (中央大学・研究会副代表)

■ DDL 研究会

中條清美氏 (日本大学) の司会のもと、以下の 3 件の発表が行われました。(1) 「教育用例文コーパス SCoRE プロジェクトの完了」中條清美氏, (2) 「実践報告: m-SCORE, SCoRE および教科書例文等を用いた(quasi)DDL の試み」若松弘子氏 (筑波大学), (3) 「小学生のための DDL サイトの開発」西垣知佳子氏 (千葉大学)・赤瀬川史朗氏 (Lago 言語研究所)・石井雄隆氏 (千葉大学)

■ ESP 研究会

以下の 2 件の発表が行われました。(1) 「言語

に表現される luxury : Four Seasons Hotel のウェブサイトを用いたケーススタディより」近藤雪絵氏 (立命館大学), (2) 「英語アブストラクト執筆支援ツール開発のための科学論文分析」山下美朋氏 (立命館大学)

■ コーパスと CEFR 研究会

投野由紀夫氏 (東京外国語大学) の司会のもと、次の発表が行われました。「日本人中高生にとって習得の難しい英文法項目: 作文コーパスと添削データに基づく分析」投野由紀夫氏・石井康毅氏 (成城大学)

■ ツールと統計手法 (Corpus Tools and Statistical Methods) 研究会

アントニ・ローレンス氏 (早稲田大学) の司会のもと、次の発表が行われました。「Cluster Tables: An Alternative Tool to KWIC」Michael McGuire 氏 (関西外国語大学)

英語コーパス学会第 45 回大会のお知らせ

日時: 2019 年 10 月 5 (土) ~ 10 月 6 日 (日)
場所: 高知県立大学 (永国寺キャンパス)

大会の詳細については 8 月前半までに当学会ウェブサイトに掲載予定の大会資料をご覧ください。大会資料の冊子は、登録されている住所宛にお送りします。

■ 新入会員紹介

Barry Grossman	(八戸学院大学)
Michael McGuire	(関西外国語大学)
菊池由記	(大阪大学, S)
竹森ありさ	(大阪大学, S)
深津勇仁	(慶應義塾大学, S)
松田佑治	(立命館大学)
村岡宗一郎	(日本大学, S)

(S は学生会員)

(2018 年 12 月 17 日から 2019 年 7 月 18 日までの入会者)

■ 理事会の決定事項について

2019 年 4 月 20 日 (土) に名古屋工業大学において理事会が開催されました。承認された人事のうち新任と退任について報告いたします。(理事会後にメール審議で承認された内容も含まれます。) 役員・委員の新任・再任の先生方には学会運営で重要な役割を果たしていただくこととなりますが、

よろしくお願ひ申し上げます。

(1) 副会長・理事

・副会長（退任）

井上永幸先生（広島大学）

井上先生，英語コーパス学会の副会長の重責を担ってくださりありがとうございました。また，事務局を支えてくださり，ありがとうございました。

・理事（退任）

井上永幸先生（広島大学）

梅咲敦子先生（関西学院大学）

高橋薫先生（東京理科大学）

井上先生，梅咲先生，高橋先生，長きにわたり理事として英語コーパス学会を支えてくださり，ありがとうございました。

・理事（新任）

小林雄一郎先生（日本大学）

杉森直樹先生（立命館大学）

住吉誠先生（関西学院大学）

(2) 事務局

・監事（退任）

加野まきみ先生（京都産業大学）

加野先生，2期にわたって監事をお務めくださり，ありがとうございました。

・監事（新任）

石川有香先生（名古屋工業大学）

(3) 編集委員会

・委員（新任）

今林修先生（広島大学）

小島ますみ先生（岐阜市立女子短期大学）

(4) 学会賞選考委員会

・委員（退任）

新井洋一先生（中央大学）

新井先生，長きにわたり学会賞選考委員の重責を担ってくださり，ありがとうございました。

・委員（新任）

塚本聡先生（日本大学）

<会誌『英語コーパス研究』第27号論文投稿募集について>

『英語コーパス研究』編集委員会委員長

田畑智司（大阪大学）

『英語コーパス研究』第27号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」，「研究ノート」，「総説論文」，「書評論文」，「実践報告」

2. 「書評」，「コーパス紹介」，「ソフトウェア紹介」，「海外レポート」，「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【原稿提出期限】2019年11月30日（土）

電子メール添付にて提出してください。提出方法等についての詳細は学会 Web ページの投稿規定 http://jaecs.com/jnl/jnl_kitei.pdf を参照してください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

『英語コーパス研究』編集委員会

E-mail : jaecs.ed@gmail.com

【採用通知】2020年1月

【発行日】2020年3月31日

（発送は2020年6月中旬の予定）

■ 事務局から

事務局からは情報発信のツールとして，ホームページ，ニューズレター，JAECs メーリングリストでイベントの案内などを随時行っております。

◇ 会費納入のお願い

2019年度会費（一般6,000円，学生3,000円）未納の方は，近くお送りする払込取扱票を使ってお納めいただきますよう，ご協力をお願いいたします〔振替口座：00930-3-195373〕。払込取扱票を紛失された方は，郵便局に備え付けのものに上記の振替口座の記号・番号と加入者名「英語コーパス学会」をご記入の上お納めください。

過年度会費未納の方は，2019年度分と併せてお納めください。過年度会費未納の場合，機関誌などの送付を一時中止させていただいております。

住所，所属などに変更や異動のある方は，学会ウェブサイトの「入退会・変更届」からのお手続きをお願い申し上げます。

※会員の皆様には，日頃より会費の当該年度内納入にご協力をいただきまして，お礼申し上げます。会費を滞納されますと，退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にもなりかねません。会員の皆様におかれましては，円滑な

学会運営のためにご協力いただけますようお願い申し上げます。なお、退会を希望される場合は、当該年度内に学会ウェブサイトの「退会案内」からのお手続きをお願い申し上げます。

◇FORUM の原稿募集中！

英語コーパス学会 Newsletter では会員の皆様からの FORUM への投稿を募集しています。国際学会報告、研究会の紹介、新刊紹介など、会員の皆様の情報交換の場として Forum が活用されることを願っております。以下、詳細を記します。掲載の可否につきましては、事務局で判断させていただきます。

- **FORUM のテーマ**：国際学会報告、研究会の紹介、新刊紹介など英語コーパス学会にとって有益と思われる情報
- **締め切り**：5月末あるいは10月末
- **分量**：800～1,600字程度（画像も可）
- **送付先**：jaecs.hq@gmail.com

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

■**新刊紹介**：滝沢直宏（2017）『言葉の実際 2：コーパスと英文法（シリーズ英文法を解き明かす：現代英語の文法と語法）』東京：研究社。

報告：森下裕三（環太平洋大学）

本書は、立命館大学大学院教授の滝沢直宏氏によって書かれた英語の文法と語法についての著書である。正規表現を利用した緻密なコーパスデータの分析によって、英語のさまざまな特性が明らかにされている。

コーパスを利用した文法および語法の研究は、国内外でも活発におこなわれている。しかし、Brigham Young University の Mark Davies 教授によるウェブ上のコーパスを利用した研究が目立つというのが実情である。本書では、こうしたウェブ上のコーパスに依拠せず、テキスト処理ツールによってコーパスがテキストファイルとして扱われている。具体的なデータ抽出の過程において、どのコーパスを利用し、どのような正規表現を利用したのかがすべて明示されている。このような記述のおかげで、本書の読者であれば誰でも著者と全く同じデータを抽出することができる。

本書は4部構成で、第1部では、文法および語法研究のひとつの手段としてコーパスを利用する意義と利用方法について述べられている。第2部

では、-ly 副詞についての詳細な議論を通じて、コーパスの使い方が示されている。第3部では、コロケーション研究を通して、母語話者の心的辞書に潜む知識の一端が明らかにされている。最後の第4部では、周遍的な構文の他に関係代名詞の what や最上級といった文法項目の性質に光が当てられている。以下では、本書に特徴的な点や特に興味深い研究事例を挙げながら、各章の内容を紹介していく。

第1章では、言語研究の一次資料として、どのようにコーパスが役立つのかが説明されている。コーパスには代表性が求められることが多いが、本書では代表性よりも規模の大きさを重視する。著者が関心を寄せる事例は、大規模なコーパスでなければ多数の用例を抽出することが難しいためである。本書の第4部における研究事例を見ることで、コーパスにおける規模の重要性は自明となる。

第2章では、コーパスをテキストデータとして処理する方法とその利点を挙げている。grep による文単位での任意の語の振る舞いを確認する方法、そして任意の語の前後で共起する語を知るための共起語検索や KWIC と呼ばれる形式などが紹介されている。さらに、具体的な語句の指定ができない構文を研究対象とする場合に、パターンによる検索を可能にするためには正規表現が必要であると述べられている。

第3章では、BNC と COCA において -ly 副詞を検索する場合に、どのような正規表現によって指定可能なかを、それぞれのコーパスに与えられた品詞情報とともに示している。コーパスに付与された情報の仕組みについて概観しておくことで、次章以降で示される具体的なデータが、どのように抽出されているのかが理解できる仕組みである。

第4章からは、具体的な語を指定しながら、正規表現によって抽出されたデータから、共起しやすい語句や接頭辞などが明らかにされていく。特に興味深いのは abundant と abundantly の事例研究である。abundant は「量が多い」ことを意味する形容詞である。COCA と BNC における共起傾向では、右隣の語として前置詞の in や名詞の evidence や supply が多く、ここに意外性はない。本書では、この形容詞に -ly を付加した abundantly が示す意外な語法が明かされている。

第5章では、多くの先行研究を踏まえながら、本書におけるコロケーションの定義を示している。ここで示された「不連続な共起」を含む定義に従い、第7章では、具体的なコロケーションについて母語話者の心的辞書に潜む情報が暴かれて

いくのである。

第 6 章では、コロケーションとは何かを数値によって示すことを目的として、MI-score と t-score の計算方法が紹介されている。もちろん、統計値は参考にはなるが、有意義な語と語の連鎖を見つけ出すための銀の弾丸ではないという点への言及も忘れられていない。

第 7 章では、-ly 副詞と形容詞の連鎖について、第 6 章で紹介された MI-score と t-score に基づいた議論が展開されている。たとえば、-ly 副詞に最上級形容詞が後続する場合には、incontestably と volumetrically がともに t-score が低い例として挙げられている。しかし、統計値のみに頼ることなく分析を深めていくことで、incontestably と volumetrically の違いを顕在化させている。

第 8 章では、周辺的な構文として、目的語に動詞が後続する語順になる構文について議論されている。この語順の構文に現れやすい語を特定するだけでなく、別の構文までも研究の射程としている点が興味深い。また、非常に珍しい周辺的な構文を記述していくための方法についても言及されている。

第 9 章では、前章に続いて、周辺的な構文が扱われている。James Joyce の *Ulysses* に見られる特殊な構文である。巨大なコーパスを利用しながら、起源となる新約聖書の「マタイ伝」に構文の起源を見出し、さらに拡張の経緯とその根拠についても詳細に分析されている。

第 10 章では、文法上不要な自由関係代名詞の what について議論されている。仮定法の what would have been に後続する語を COCA で調査した例が興味深く、359 例のうち、ある語が約 1 割に相当する 37 例も見つかっている。本書を読む前に、どのような語が多かったのか予想してみたい。そして、実際に本書を手に取り答えを確認してみたい。

第 11 章では、one of the ... -est や of the top 50 ... -est といった最上級形と共起する表現について調査されている。特に、序数と最上級形を組み合わせた表現では、興味深い実例がいくつも紹介されている。最上級という概念について改めて考えさせられ、ことばの表現力とおもしろさを実感した。

このように、本書を読みながら英語の文法や語法について多くの実例を眺めているだけでも、英語の表現力を再認識することができる。そして、本書には興味深い実例を探り当てるための手法も詳細に記されている。本書で示されている検索方法に従って、読者が自身の手でさまざまな実例を抽出することによって、正規表現を利用した研究手法を身に付けることができるだろう。さらに、

読者が自身の研究課題について、正規表現や統計値に基づいた研究をおこなうことによって、本書では示されていない英語の新事実が解き明かされるかもしれない。

2019年7月20日発行

編集・発行 英語コーパス学会
会長 投野 由紀夫
事務局 〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20
成城大学社会イノベーション学部
石井康毅研究室気付
e-mail: jaecs.hq@gmail.com
URL: <http://jaecs.com/>
